

瓦窯で焼かれた瓦はここに運ばれていた!

## 出雲国分寺の発掘調査

出雲国分寺はこれまで多くの発掘調査が実施されており、寺の中心施設や、寺域の範囲が明らかとなっています。発掘調査では、寺院の屋根に葺かれていた瓦がたくさん出土します。現代の家の瓦は椽瓦が使われていますが、古代の瓦葺建物は主に丸瓦と平瓦を使っていました。国分寺は中心施設だけでも6棟の建物が建っていたと考えられているので、たくさんの瓦が必要だったことが読み取れます。

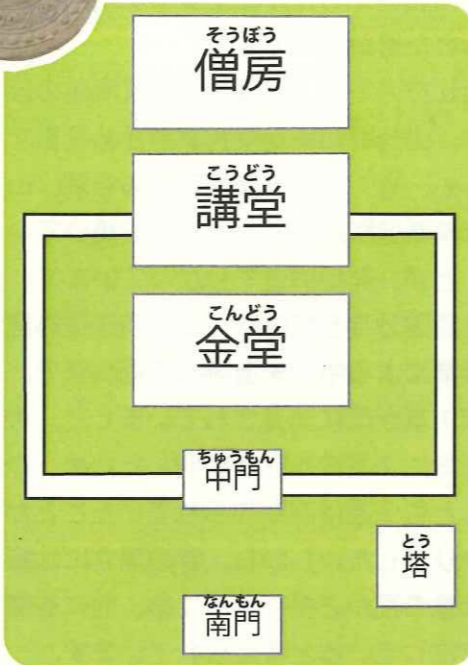


図4 出雲国分寺跡の建物配置



出雲国分寺跡の発掘調査で出土した瓦

## 『出雲国風土記』編纂から出雲国分寺・国分尼寺建立まで

松江の歴史を知るうえで、欠かせない古代の書物が『出雲国風土記』(以下、『風土記』)です。『風土記』が編纂されたのは、733(天平5)年のことです。当時の出雲国造であった出雲臣広嶋によってつくられました。『風土記』には、古代出雲国の地理などが詳細に記されており、1300年前の松江の風景をリアルに知ることができます。

今回の瓦窯と関わりの深い出雲国分寺と国分尼寺は、741(天平13)年に聖武天皇の命令によって建立されたお寺です。出雲国分寺、国分尼寺は『風土記』が編纂されてから8年後に建立の命令が出された寺であるため、『風土記』には国分寺、国分尼寺に関する記事は書かれていないのです。当時の旧国単位で建立されており、国分寺、国分尼寺の建設は、まさに天皇からの発令による国家プロジェクトでした。出雲国の国分寺と国分尼寺は、意宇平野が南に一望できる竹矢町の一角に建てられました。

出雲国分寺、国分尼寺がある意宇平野は、役所や寺院が密集する古代出雲の中心地といえ、『風土記』はその当時の繁栄ぶりを鮮明に私たちに伝えてくれています。

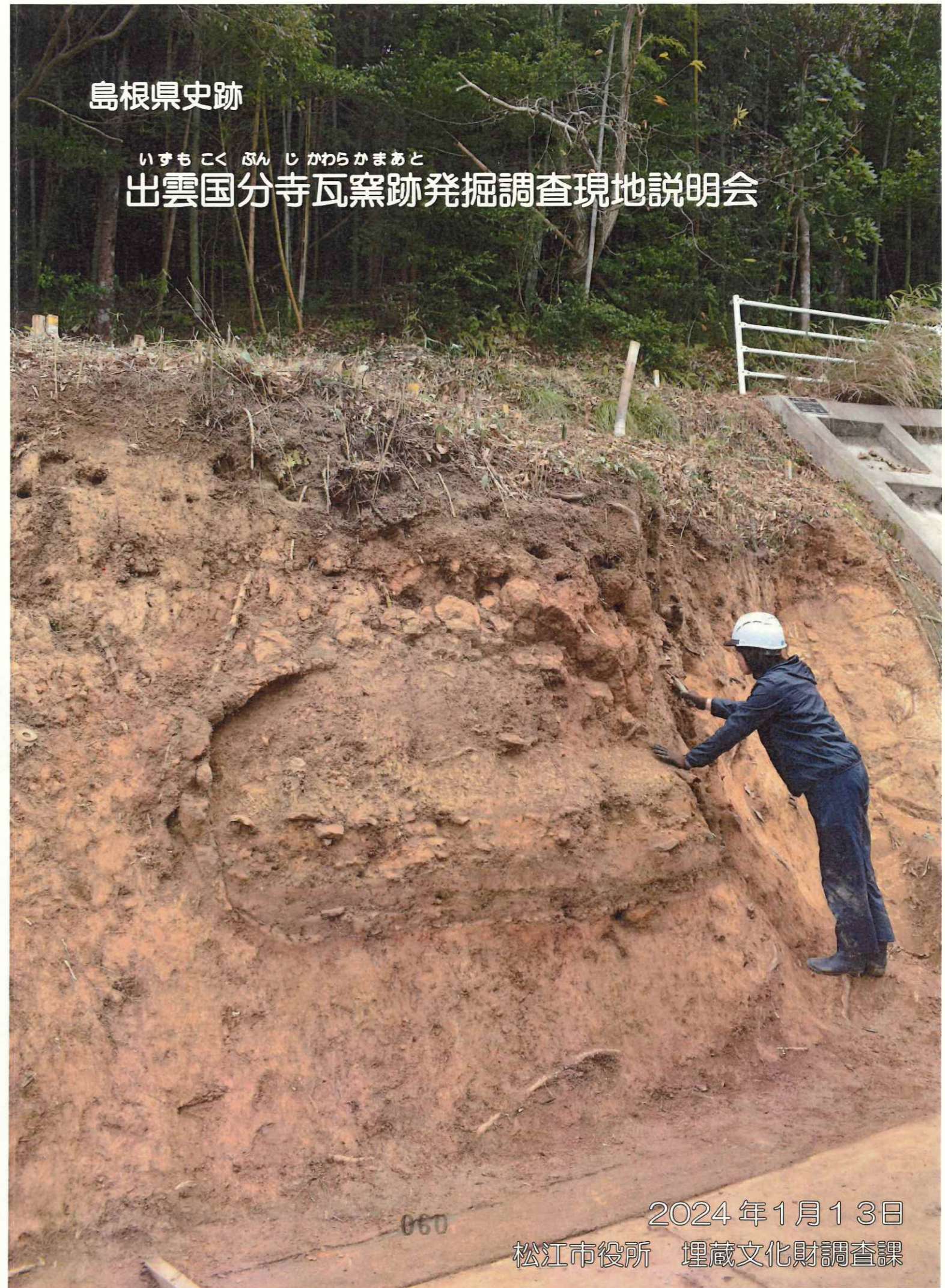
当時の役所や寺院は地下に埋もれ、遺跡となり、発掘調査を通して私たちの目の前に姿を現します。そして書物では読み取れない、古代の人々の生活ぶりをさらに生々しく伝えてくれています。今回の瓦窯の発掘調査でも、奈良時代の瓦職人が、いかに一大事業であった国分寺、国分尼寺の建設を支えていたのか、その一端に触れることができたように思います。

### 発掘主体者

松江市役所 文化スポーツ部 埋蔵文化財調査課 調査企画係・発掘調査係  
〒690-8540 松江市末次町 86 TEL:0852-55-5284 FAX:0852-55-5571

## 島根県史跡

### いずもこくぶんじかわらかまあと 出雲国分寺瓦窯跡発掘調査現地説明会



2024年1月13日

松江市役所 埋蔵文化財調査課

# 出雲国分寺瓦窯跡発掘調査

緊急予防治山事業（急傾斜地法面対策工事）のため、2023年12月より、出雲国分寺瓦窯跡の発掘調査を松江市埋蔵文化財調査課で実施しています。

## ① 出雲国分寺瓦窯について

竹矢町に所在する出雲国分寺瓦窯跡は、古代の瓦を焼いていた窯です。

瓦窯の東西にある出雲国分寺や出雲国分尼寺に用いられる瓦を焼いていた、官営の瓦窯であると考えられています。

この瓦窯は、1972（昭和47）年に初めて発見され、1973（昭和48）年に島根県の史跡に指定されています。

今回の発掘調査では、2基の窯が発見され、そのうち2号窯はととも残りが良く、古代の瓦職人が、どんな構造の窯を使って瓦を焼いたのか、明らかにすることができました。最初の発見から実に50年振りの調査となります。



図1 出雲国分寺瓦窯跡の位置

## ② 出雲国分寺瓦窯の構造

発掘調査では、2つの窯跡が見つかりました。そのうち2号窯はととも残りがよく、薪を燃やした<sup>ねんしょうしつ</sup>燃烧室の一部から、瓦を焼いた<sup>しょうせいしつ</sup>焼成室までを検出することができました。

窯は床面が平坦な部屋をもつ、「平窯」という構造で、焼成室に、瓦を置くための「<sup>あぜ</sup>畦」を設けた「<sup>ゆうけいしき</sup>有畦式」に分類される構造をしています。

燃烧室で火が焚かれ、<sup>つうえんこう</sup>通炎孔を通り、焼成室に向かって一気に熱を移動させる仕組みです。燃烧室は、床面が何層もあり、繰り返し土を盛りながら操業していたことがわかります。

焼きあがった製品は、焼成室の天井を壊して出し入れがされたと考えられますが、今回の調査では焼成室の天井までは検出されていません。

瓦を置いた畦は、焼かれて固くなった焼土に、丸瓦が積み重なった状態で発見されました。この瓦は「<sup>こうちくざい</sup>構築材」といって、製品ではなく、窯の部材として使用されたものです。



2号窯燃烧室の断面

アーチ状の天井や、操業面が何層も重なっている様子が確認できます。



2号窯全景

写真左が燃烧室、右が焼成室で構築材の瓦がたくさん出土しています。

## ③ 古代出雲国の瓦づくり

奈良時代の瓦は主に寺院や役所関係の建物に葺かれており、一般的な住居にはまだ使われていませんでした。ここ出雲国でも瓦が出土する場所は、奈良時代の寺跡や役所跡（国府など）、それらに関連する遺跡といった、限られた遺跡のみです。

松江市内では、出雲国分寺瓦窯跡のほかに、山代郷南新造院瓦窯跡があります。ここも、近くにある奈良時代の寺院、山代郷南新造院跡に使われた瓦を焼いていたことが、発掘調査で分かっています。

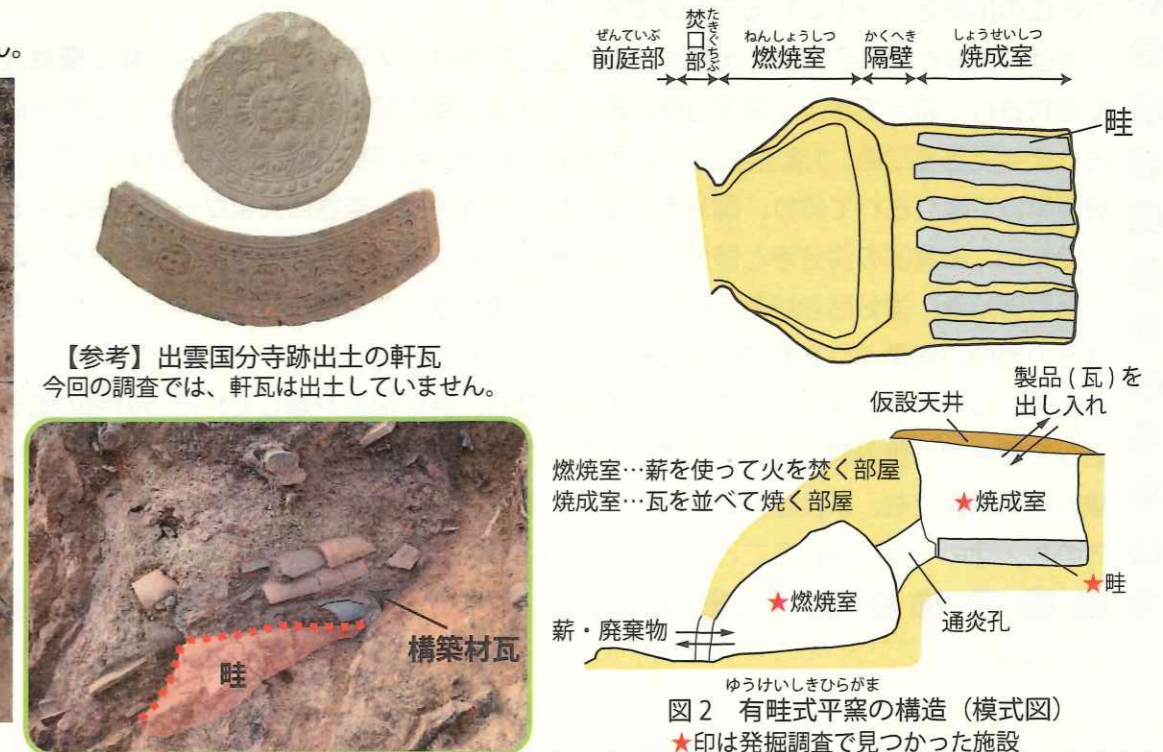
出雲国分寺瓦窯跡は、山陰高速道路建設事業による中竹矢遺跡の発掘調査で、平窯1基が既に発見されていました。今回新たに2基の存在が判明したため、少なくとも3基は窯が作られていたことが分かりました。しかし、寺の建立には膨大な量の瓦が必要であるため、他にも窯は存在していると考えられています。



図3 意宇平野周辺の古代寺院・官衙遺跡の分布 (S=1/25,000) 国土地理院地図を使用。★印は瓦窯の遺跡。矢印は瓦の供給先を示す。



調査区全景（写真測量）



【参考】出雲国分寺跡出土の軒瓦  
今回の調査では、軒瓦は出土していません。



2号窯焼成室の畦

図2 有畦式平窯の構造（模式図） ★印は発掘調査で見つかった施設 奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』をもとに作成。